



測候時報第71巻第2号・第3号・第4-6号合併号及び 気象庁研究時報56巻5-6号合併号の内容案内

測候時報第71巻第2号(平成17年1月20日発行)、第3号(3月9日発行)、第4-6号合併号(3月9日発行)及び気象庁研究時報56巻5-6号合併号(3月16日発行)が発行されましたので内容(表題:著者:ページ:要旨)についてお知らせいたします。

なお、測候時報・気象庁研究時報は気象業務支援センター(Tel:03-5281-0440, Fax:03-5281-0443, URL:http://www.jmbc.or.jp)から購入できます。

<測候時報>

◇防災情報提供センターの開設と情報の提供:観測部観測課防災情報提供管理室:P21-58(第2号)

(要旨省略)

◇高分解能大気放射伝達モデル「LBLRTM」による大気の透過率・放射輝度等の計算方法:藤枝 鋼・深堀正志:P59-127(第3号)

Line-by-Line Radiative Transfer Model (LBLRTM)は、広範かつ継続的に観測結果との検証が行われていることなどから、世界中で最も広く利用されている高分解能の放射伝達モデルの一つである。本稿では、大気の光学的厚さ、透過率、放射輝度、輝度温度及びフラックス等の計算のために必要なLBLRTM及び関連する補助ソフトウェアの機能・特徴、プログラムの構成、入出力ファイルの概要及び設定方法、並びに計算例等について解説する。

◇第9回国際日射計比較観測とアジア地区放射センターで実施した日射計相互比較観測:本田耕平・井上長俊・木下篤哉・廣瀬保雄:P129-145(第4-6号合併号)

WMO第9回国際日射計比較が2000年9月25日から10月13日までスイスのダボスにある世界放射センターで開催された。この比較で得られた測器定数は、今後5年間、第II地区(アジア)標準及び日本の国家標準(放射基準)として、直達日射計や全天日射計の校正に供される。また、国際比較実施後の2002年に第II地区(日本:つくば)で日射計比較観測実施した。これらの概要を報告する。

◇エーロゾル観測・監視システムによるエーロゾルの観測:観測部環境気象課・観測部環境気象課大気環境観測所・気象研究所:P147-164(第4-6号合併号)

2002年3月、気象庁は大気環境観測所(岩手県大船渡市綾里)にライダーシステムを導入し、以来、エーロゾルの鉛直分布観測を継続している。このライダーシステムによる2年余りの定常観測を通して、黄砂、火山性エーロゾル、森林火災の煙といったエーロゾルが観測所上空に飛来したことが確認された。本稿では、このライダーシステムの概要とともに、観測されたいくつかの事例を紹介する。

◇地上オゾン校正装置のGAW基準への準拠と基準変更に伴う観測濃度の補正について:観測部環境気象課:P165-176(第4-6号合併号)

気象庁では2002年3月に地上オゾン校正装置を更新するとともに、校正基準を変更することによって、世界気象機関の全球大気監視プログラムの基準への準拠を行った。この校正基準の変更に伴い、データ接続のための濃度補正を行ったので、この新たな校正方法の概要とその濃度補正の方法について報告する。また、観測装置に圧力・温度補正機能がないために生じている濃度誤差についての評価もあわせて報告する。

<気象庁研究時報>

◇L-momentsを用いた強風の再現期待値の推定
L-momentsを用いた強風の再現期待値の推定:三浦大輔・水野 量:P97-125

強風に関する情報を空間的にきめ細かく提供するための基礎資料とするため、観測網の密なアメダスデータを用いて強風の地域的・時間的特性の把握と再現期待値の推定を行った。強風の再現期待値の推定にはL-moments法を利用した。その結果、従来の積率法では表現不可能だった正に大きくひずんだ分布形の表現が可能になり、データの分布形への適合度が向上した。また、標本変動による誤差も抑えることができた。

(気象庁総務部企画課図書資料管理室)